

# オセアニア [NZ]



## 1 農・畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、温暖な気候と豊かな土壌に恵まれ、国土面積（2680万ヘクタール）のうち、約5割に当たる1410万ヘクタールが農地となっている農業立国である。

また、人口が約450万人と国内の市場規模が小さいため、農畜産業は貿易に依存した構造となっており、総輸出額（FOB）に占める農畜産物の割合は6割を超え、外貨獲得上、重要な地位を占めている。

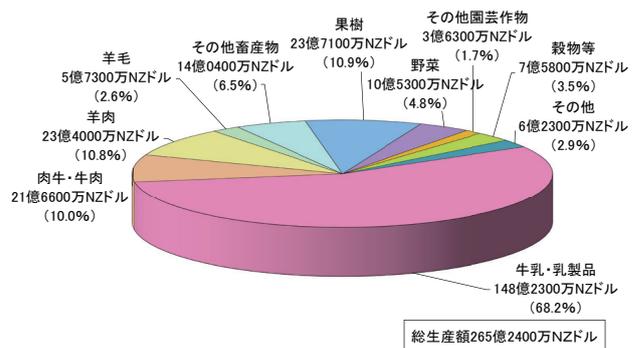
畜産部門は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額の約8割をともに占めている。特に酪農・乳業は、農畜産業粗生産額の約3分の2、農畜産物輸出額の5割以上を占めており、NZ農畜産業の基幹部門である。

2013/14年度（4月～翌3月）の農畜産業粗生産額は、265億2400万NZドル（前年度比22.1%増、推計）となった（図1）。乳価上昇と良好な気候条件に伴う生乳生産の拡大を背景に、牛乳・乳製品は148億2300万NZドル（同42.7%増）と大幅に増加した。一方、肉牛・牛肉は21億6600万NZドル（同6.5%減）とかなりの程度減少した。羊肉は23億4000万NZドル（同3.4%増）とやや増加したものの、羊毛は5億7300万NZドル（同2.4%減）とわずかに減少した。

2013/14年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額（FOB）は、301億6480万NZドル（前年度比20.8%増）と大幅に増加した（図2）。

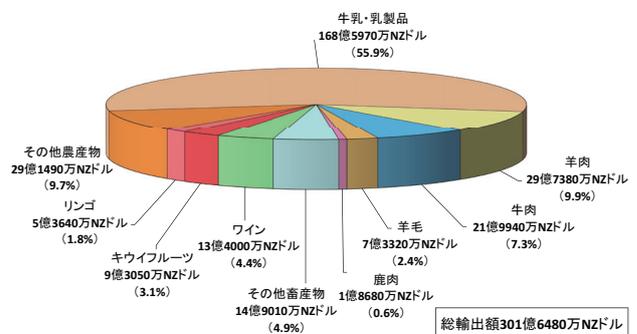
畜産部門については、牛乳・乳製品は、生産額の増加に伴い増加傾向で推移しており、牛肉は、米国や中国の需要に支えられて、前年度に引き続きわずかに増加した。品目別輸出額を見ると、牛乳・乳製品は168億5970万NZドル（同38.5%増）、羊肉（ラム・マトン）は29億7380万NZドル（同11.9%増）、牛肉（子牛肉含む）は21億9940万NZドル（同2.6%増）、羊毛は7億3320万NZドル（同8.1%増）となった。

図1 農畜産業粗生産額（2013/14年度）



資料：MPI「Situation and Outlook For Primary Industries 2015」  
注：年度は4月～翌3月。

図2 農畜産物輸出額（2013/14年度）



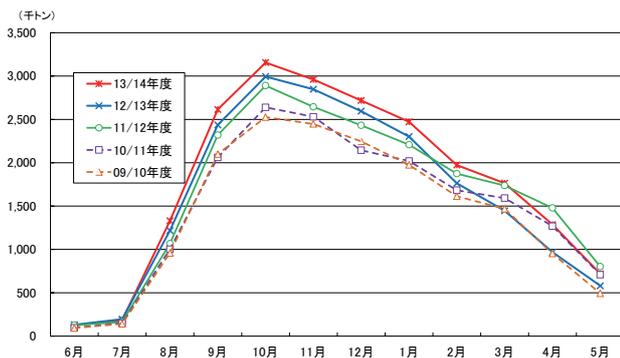
資料：Beef + Lamb NZ「Compendium of New Zealand Farm Facts (39th edition April 2015)」  
注：年度は7月～翌6月。

## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、年間の生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる8月から搾乳を開始し、10月から初夏となる12月に生乳生産のピークを迎え、その後、次第に減少して5月頃にはほとんどが乾乳してシーズンを終えるという、明確な季節型生産体系となっている（図3）。そのため、生乳生産の中心となる9月から翌2月の6カ月間に、年間の約4分の3の生乳を生産する。

図3 生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand

注：年度は6月～翌5月。

NZでは、放牧中心の生産体系により、生乳生産のコストは、世界的に見ても最も低い水準にある。生産量の95%が輸出に仕向けられる乳製品は、NZの総輸出額の3分の1以上を占めており、酪農・乳業部門は、NZの基幹産業の一つとして位置付けられている。

NZは、生乳生産量では全世界の約6%を占めるにすぎないが、世界最大の乳製品輸出国である。特にバターおよび全粉乳の国際市場でのシェアは6割を超える。国内市場の規模が小さいため、生乳生産者価格や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受ける構造にある。

### ①主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。ニュージーランド・デイリーボード（NZDB）が、2001年9月まで、乳製品の一元輸出機能を持っていたが、同年10月、2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協（乳業メーカー）フォンテラが誕生し、酪農産業の再編が行われた。

フォンテラの誕生と同時に2001年、生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法（Dairy Industry Restructuring Act 2001）が成立した。同法には、フォンテラの寡占による弊害を回避するため、乳業メーカーの新規参入機会の付与が盛り込まれている。このため、2015年8月現在、フォンテラには年間79.5万キロリットルを上限として、他社に生乳を供給することが義務付けられている。

### ②生乳の生産動向

経産牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加を背景に、増加基調で推移している（図4）。また、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換が進んでいることも、飼養頭数増加の要因となっている。

NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域などを中心に行われてきた。しかし、近年では、乳製品の国際価格の高騰を契機に、南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されて酪農が盛んになったことから、特に南島での頭数拡大が著しい。2013/14年度（6月～翌5月）の経産牛飼養頭数は、492万3000頭（前年度比2.9%増）であり、うち北島は299万頭（同1.2%増）とわずかな増加にとどまる一方、南島は193万3000頭（同5.7%増）と北島よりも増加幅が大きくなっている（表1）。

表1 地域別の飼養戸数・頭数・規模の推移

地域・区分/年度		09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
北島	飼養頭数(千頭)	2,862	2,906	2,914	2,955	2,990
	飼養戸数(戸)	8,973	8,947	8,912	8,912	8,859
	1戸あたり飼養頭数(頭)	319	325	327	332	338
南島	飼養頭数(千頭)	1,535	1,623	1,721	1,829	1,933
	飼養戸数(戸)	2,718	2,788	2,886	2,979	3,068
	1戸あたり飼養頭数(頭)	565	582	596	614	630
合計	飼養頭数(千頭)	4,397	4,529	4,634	4,784	4,923
	飼養戸数(戸)	11,691	11,735	11,798	11,891	11,927
	1戸あたり飼養頭数(頭)	376	386	393	402	413

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：年度は6月～翌5月。

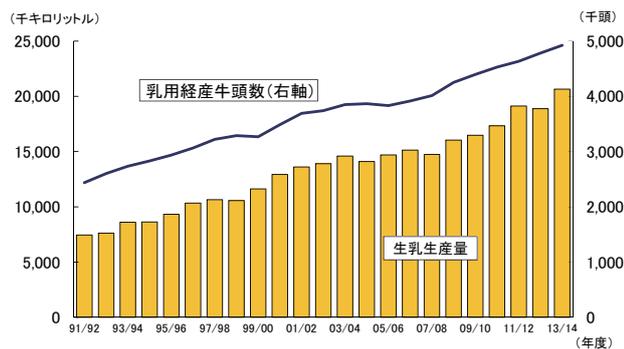
2：各年12月末時点。

3：頭数は当該シーズンに搾乳された乳用牛頭数。

4：1戸あたり飼養頭数の「合計」は、北島と南島全体の平均である。

飼養規模の拡大に加えて、補助飼料の給与増加による1頭当たり乳量の増加傾向から、生乳生産量も右肩がりの推移となっている(図4)。2013/14年度は、冬から春にかけての良好な気候条件により牧草の生育が順調であったため、1頭当たり乳量は4196リットル(同6.3%増)、生乳生産量は2065万7000キロリットル(同9.4%増)と、ともにかなりの程度増加した。

図4 乳用経産牛飼養頭数と生乳生産量の推移



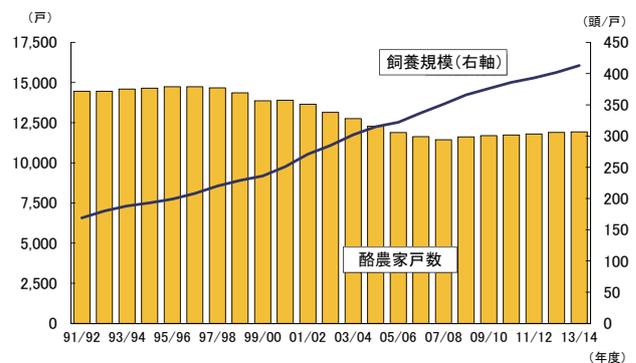
資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：年度は6月～翌5月。

2：乳用経産牛頭数は12月末時点。

酪農家戸数は、2007/08年度まで減少傾向で推移していたが、同年度に乳製品の国際価格が高騰したことを受けて以降増加しており、2013/14年度は1万1927戸(前年度比0.3%増)と、6年度連続で前年度を上回っている(図5)。また、1戸あたり経産牛飼養頭数も、規模拡大による増加傾向が続いており、2013/14年度は413頭(同2.7%増)となった。500頭以上および1000頭以上を飼養する経営が全体に占める割合はそれぞれ27.6%、5.0%となっており、ともに前年度を上回っている。

図5 酪農家戸数と飼養規模の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注：年度は6月～翌5月。

### ③牛乳・乳製品の需給動向

NZでは、最大手の乳業メーカーであるフォンテラが約9割の乳製品生産シェアを占める。

輸出相手国は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界140カ国に及んでいる。フォンテラは、2002年に世界的な大手食品メーカー「ネスレ」と合併企業を設立し、2003年1月から、中南米の市場での乳製品製造・販売を手がけている。また、2007年には、中国で牧場を建設し生乳生産を開始するなど、国際市場への積極的な進出を図っている。

2013/14年度(7月～翌6月)の主な乳製品の輸出量は、中国の急速な需要拡大を背景に、全粉乳(140万7000トン、前年度比9.8%増)とバター(49万

5000トン、同7.1%増)は前年度を上回った一方、脱脂粉乳(36万トン、同12.9%減)とチーズ(26万6000トン、同14.3%減)は前年度を下回った(表2)。これは、中国向けの全粉乳生産に生乳が優先的に仕向けられたためとみられており、脱脂粉乳とチーズの輸入量は、今後、国内生産量の増加や、NZドル安で推移する為替相場を背景に、長期的に増加していくとみられている。

表2 生乳生産量および乳製品輸出量の推移

(単位：千頭、千キロリットル、千トン)

区分/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14	
経産牛飼養頭数	4,397	4,529	4,634	4,784	4,923	
生乳生産量	16,483	17,339	19,129	18,883	20,657	
輸出量	バター	247	394	442	462	495
	チーズ	279	248	275	310	266
	全粉乳	903	1,068	1,126	1,281	1,407
	脱脂粉乳	384	349	349	413	360

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注1：経産牛飼養頭数は各年度12月末時点、単位は千頭。

注2：生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。

注3：乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

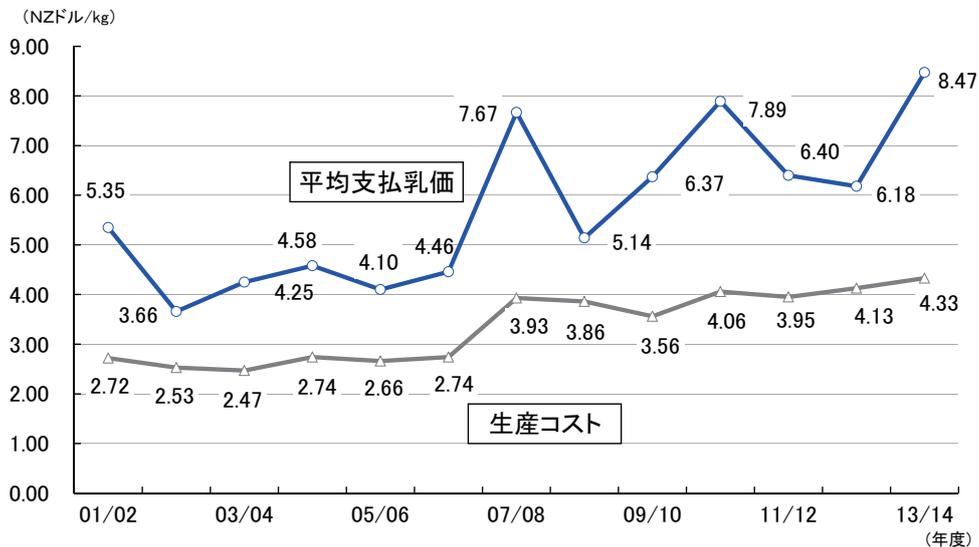
#### ④乳価の動向

生乳生産者価格(平均支払乳価)は、乳製品の国際相場や為替相場(NZドル)の動向などに左右される。

2013/14年度(6月～翌5月)の平均支払乳価は、中国をはじめとするアジアからの乳製品需要の拡大を背景に、乳固形分1キログラム当たり8.47NZドル(前年度比37.1%高)と大幅に上昇した(図6)。

一方、2013/14年度の生産コストは、同4.33NZドル(同4.8%高)となった。放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農であるが、2007/08年度の乳価上昇後、補助飼料の投入やかんがい設備への投資などから、近年、生産コストは微増傾向で推移している。

図6 生産コストと平均支払乳価の推移(乳固形分ベース)



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、「Economic Survey」

注：年度は6月～翌5月。

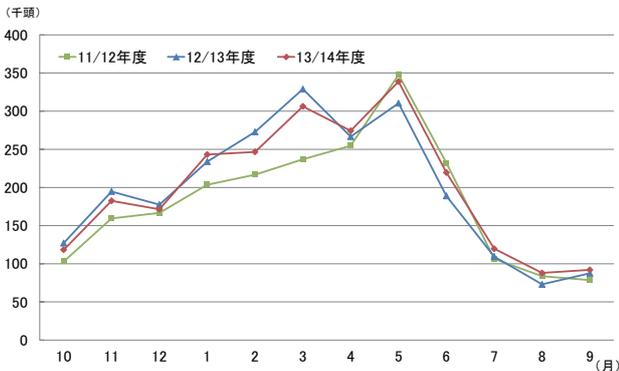
## (2) 肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、草地に依存した生産体系となっており、フィードロットでの穀物肥育による生産は、ごくわずかである。

牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることは、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、と畜頭数は生乳生産が終了する5月にピークを迎える。これは、乾乳期に入るのに合わせて、乳廃牛の出荷が増加するためである。その後、と畜頭数は冬に向けて大きく減少し、8月から9月は、ピーク時の3分の1程度にまで減少する(図7)。

図7 成牛と畜頭数の推移



資料：Statistics NZ  
注：年度は10月～翌9月。

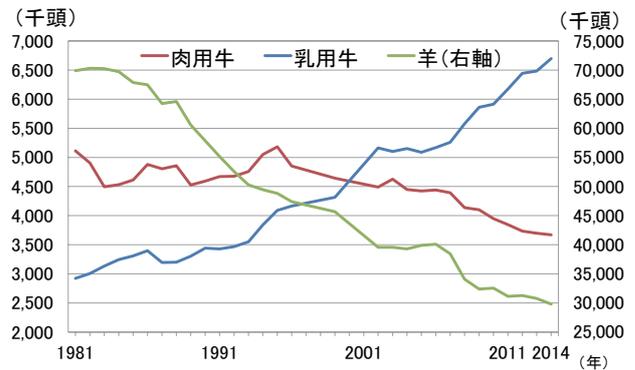
また、肉用牛として飼養される牛の3分の1程度は、乳用種または交雑種(乳用種×肉用種)となっている。酪農部門から供給される乳用種の雄牛は、多くは子牛肉として出荷されるものの、一部は去勢せずに飼養され、乳用経産牛と同様に加工用牛肉(ひき材用)として、NZ最大の輸出市場である米国を中心に輸出されている。このように、酪農部門は、牛肉供給の面でも重要な役割を担っている。

NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから、酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉のうち、金額ベースで8割程度が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受けている。

### ①牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業などの、より収益性の高い部門への転換などを背景として、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりに増加している乳用牛と逆転した。特に2007年以降は、国際乳製品価格の高騰から、土地利用の酪農への転換が一層進んでおり、乳用牛の増加と、肉用牛の減少の傾向が強まっている(図8)。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



資料：Statistics NZ

2014年6月末時点の肉用牛飼養頭数は、長期的な減少傾向に加え、肉用牛の7割が飼養される北島を中心として2013年に深刻な干ばつが発生した影響から、367万頭(前年比0.8%減)と引き続き減少傾向を示した(表3)。

表3 牛飼養頭数の推移

(単位：千頭)

区分/年	2010	2011	2012	2013	2014
肉用牛	3,949	3,846	3,734	3,699	3,670
うち繁殖雌牛	1,118	1,053	1,060	1,019	1,012

資料：Statistics NZ  
注：6月末時点。

## ②牛肉の需給動向

### ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少傾向にあり、2010/11年度以降は60万トンを超える水準で推移している。

2013/14年度は、2013年からの北島の干ばつに伴うと畜頭数の増加傾向が続き、成牛と畜頭数は240万1000頭（前年度比1.2%増）となった。一方、牛肉生産量は、と畜頭数に占める経産牛の割合が高まり、平均枝肉重量が低下したことから、59万9000トン（同0.2%増）と、ほぼ前年並みとなった。

### イ 輸出動向

2013/14年度の牛肉輸出量は、過去2年の牛肉生産量の増加に伴い、39万1000トン（前年度比6.5%増）となった（表4）。

輸出地域別に見ると、最大の輸出先である米国を含む北米市場向けは20万5000トン（同7.8%増）となった。北米市場向けは、加工用牛肉が主体であり、経産牛のと畜頭数の増加に伴い増加している。さらに、米国が干ばつ後の牛群再構築の時期に当たり、国内生産が減少していることも、輸出量の増加を後押ししている。また、北米に次ぐ輸出先である北アジア市場向けは、これまでに見られた急激な増加傾向は鈍化しているものの、中国を中心に11万3000トン（同1.0%増）と増加している。

表4 牛肉需給の推移

（単位：千頭、千トン）

区分／年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
成牛と畜頭数	2,376	2,381	2,192	2,374	2,403
子牛と畜頭数	1,552	1,656	1,694	1,935	2,129
牛肉生産量	610	596	575	598	599
子牛肉生産量	25	27	28	31	34
牛肉輸出量	366	356	351	367	391

資料：Statistics NZ、Beef + lamb NZ「Annual Report」

注1：年度は10月～翌9月。

2：と畜頭数単位は千頭。

3：生産量および輸出量の単位は千トン。

4：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

## ③肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉のうち約8割（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況や、主要決済通貨である米ドルや英国ポンド、ユーロに対するNZドルの為替、また、最大の輸出市場である米国国内における牛肉の生産や価格の動向に左右される傾向がある。

輸出用肉用牛の生産者手取価格は、米国や中国からの堅調な需要により、2010/11年度以降、比較的高い水準を維持しているが、2013/14年度は、牛肉生産量増加の影響を受けて、1頭当たり909NZドル（前年度比2.6%安）とわずかに下落した（表5）。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

（単位：NZドル/頭）

区分／年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
生産者手取価格	811	971	1,016	933	909

資料：Beef + lamb NZ「Farm Facts」

注1：年度は10月～翌9月。

2：皮革を含む。